

本の ひろば

[月刊] キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2015年2月1日発行（毎月一回発行）第685号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

神学的センスの涵養 森島 豊

本・批評と紹介

高倉徳太郎 著／小塩 力、宮田光雄 解説
福音的キリスト教 ハンディ版 鶴沼裕子

ハンス・キュンク 著／片山 寛 訳
キリスト教思想の形成者たち 芦名定道

マイケル・ラブスレー 著／榊原芙美子、吉谷かおる 訳
記憶の癒し 山本俊正

ニクラウス・ペーター 著／大石周平 訳
信仰のいろはをつづる 川村輝典

F.W.グラーフ 編／安酸敏眞 監訳
キリスト教の主要神学者 下 栗林輝夫

池 利文 写真／門脇佳吉 編集・解説
アッシジの聖フランシスコの面影
小中陽太郎

アウグスティヌス 著／金子晴勇、小池三郎 訳
アウグスティヌス神学著作集 片柳榮一

荒井 献 著
使徒行伝 中巻 加山久夫

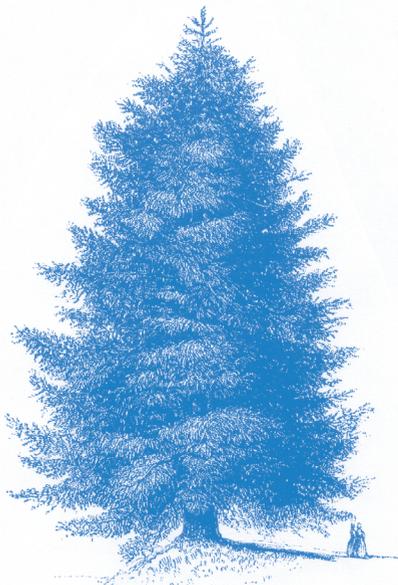
W.ブルグeman 著／福嶋裕子 訳
叫び声は神に届いた 大島 力

R.ヘステネス 著／朴 憲郁、上田好春 訳
グループで聖書を学ぶABC 小倉義明

既刊案内

書店案内

2 FEBRUARY
2015





神のみ前に立つて

十戒の心

大住雄一

● 四六判・240頁・本体2,500円

好評発売中

- 『はじめてのオウグステイヌス』 ● 本体2,000円
- 『はじめてのルター』 ● 本体1,900円
- 『はじめてのウエスレー』 ● 本体1,900円
- 『はじめてのジョンナサン・エドワーズ』 ● 本体1,800円
- 『はじめてのキング牧師』 ● 本体1,900円

20世紀の古典的名著として読み継がれる『服従』や『共に生きる生活』、そして『倫理』や『獄中書簡集』などを著すと同時に、反ナチ抵抗運動のメンバーとしてヒトラー暗殺計画に加わり、第二次大戦末期に強制収容所で殉教の死を遂げた神学者ボン・ヘッファー。彼が存在を賭けて取り組んだ神学的冒険の全貌を、ユニークなイラストとともに辿る。



S・R・ヘインズ、L・B・ヘイル
船本弘毅訳

● 四六判・224頁・本体1,800円

はじめてのボン・ヘッファー

好評既刊！

私のヴィア・ドロローサ

「大東亜戦争」の爪痕をアジアに訪ねて

村岡崇光

● 四六判・208頁・本体1,500円



慰安婦ら侵略戦争の犠牲となった人々との真の和解を訴える著者が、アジア各国での思索を綴った記録。

御言葉と共に歩む一年を！

- 内村鑑三「一日一生 新版」 ● 本体2,500円
- 徳善義和監修 湯川郁子訳「慰めと励ましの言葉」 ● 本体2,800円
- マルティン・ルターによる一日一章 ● 本体2,800円
- A・ルシー編 坂本誠訳「心を新たに」 ● 本体2,800円
- ウェスレーによる一日一章

自由の道しるべがここに！

十戒に示された神のみ心は、現代を生きる私たちに何を語りかけるのか？ 旧約聖書学の第一人者が、神から人間へ的人格的な語りかけの言葉として十戒を説き明かす。キリスト教放送FEB Cで好評を博した十戒の講解の待望の書籍化。



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549
本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e shop 教文館



出会う・本・人 神学的センスの涵養——森島豊

若き日に神学的センスを鍛えてくださった二人の恩師に出会いました。大木英夫先生と加藤常昭先生です。このお二人の先生から神学するとはどういうことか手ほどきを受け、その後の神学的思索に決定的な影響を与えられました。

大木先生の講義を受けた時、多くの神学者の名前、歴史的出来事と神学的定義が飛び交い、レベルの高さにまったくついていけませんでした。自らの無知を悲しむと同時に、その深遠な眼差しで世界を捉えたいと願い、大木先生の下で学びました。演習で指定されたテキストは、テイリツヒ『キリスト教神学思想史Ⅰ、Ⅱ』（著作集別巻二、三）でした。この時に山本七平の「神学なき西欧化」という言葉が示す日本の問題を知りました。

テイリツヒは「現代の神学の問題のみを語るということは、あたかも家の建築を土台からではなく屋根から始めるようなことである」（Ⅰ・一六二頁）と言います。大木先生はそれを「子どもは家の絵を描くとき屋根から描く。けれども、成熟した大人は土台から作る」というイメージで伝え、成熟した神学者になることを求められました。この基礎となる思索が神学思想史でした。今話題となっている議論も過去において既に扱われた形跡があります。流行に流されることなく広い歴史的視野を持ち、単に表面的な出来事を網羅するのではなく、それを深く掘り下げ、歴史的動向の中で今何が起こっているのかを捉える神学的洞察力を鍛えら

れました。テイリツヒの手引きを通して、時にテイリツヒの考えに対峙し、神学する情熱と素晴らしさを存在を通して示してくださいました。

説教塾で加藤先生の講演を初めて聞いた時よく分かりませんでした。ただ、私が質問した時、本当に自分が聞きたい事柄を先生が言葉で表し、急所を突く仕方での問いに答えられた時、この先生から学びたいと思いました。私の関心は説教できることです。テキストは常に聖書です。そこでキリストの臨在を担う言葉の鍛錬をさせられます。問われることは、常に言葉と言葉を語る存在です。そこで神学と説教の乖離している現状に気付かされた。説教に結びつかず、教会を生かすこともしない神学は、何のために、何を指して神学しているのか問われました。業績・名誉・学問的流行に流されそうになる時、説教塾は常に私の神学者としての原点に立ち帰らせる学び舎となっています。

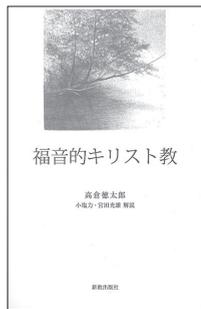
両先生は共に敗戦体験をした同世代です。キリストの福音によつてのみ日本は復興できると信じて神学研究と福音伝道に邁進されました。その両先生の口からはよく聖書の言葉が出て来ました。神学的センスとは言葉のセンスでもあります。思えば私が出会った恩師たちは皆、聖書の言葉を通して十字架のキリストに出会った人たちでした。

（もりしま・ゆたか）青山学院大学准教授・大学宗教主任

現代への問いとしての「厳しさ」

高倉徳太郎著
小塩 力、宮田光雄解説

福音的キリスト教 ハンデイ版



鵜沼裕子

今、私の手元に、『福音的基督教』の初版本がある。薄茶色の無地のクロス製で、奥付には昭和貳年十月十八日発行、発行所・長崎書店とある。元の所有者は不明であるが、赤い色鉛筆であちこちに引かれた波線や直線、かなり傷んだ各頁が熟読の跡を窺わせる。

このたび本書が、白地に緑樹の銅版画を配した爽やかな表紙のハンデイ版『福音的キリスト教』として新教出版社から再刊された。「神学的古典」と評される同書であるが、内容は、新装版の装丁に相応しく、今なおフレッシュであることに改めて驚かされた。

かつてある知人から、本書を信仰の手引きとして読んでいくということを知り、はっとさせられたことがあった。というのは、東京神学大学で「日本教会史」を担当していたころの私は、本書をすでに「古典的な書」として扱っていたからである。そして、歴史上の名著というものは、「過去の書」ではなく常に現代に生きる書として読まれるべきことを、迂闊にも講義者自身が忘れていた不明を恥じたのであった。

いるが、背後にある高倉自身の生々しい信仰体験が、ときに行間からありありと透けて見えることである。その一つは、高倉の原罪観と贖罪観である。高倉は言う、「原罪とは肉である。生来のエゴイズムである。……これがあるが故に我らは真理に從い得ない。しかも運命的な肉に対して我らは罪責を感じざるを得ないのである」(二二八頁)。かくして十字架は「我が罪に対する神の聖なるさばき」、否定であり、同時に十字架においてこそ「我をどこまでも信じ受け容れんとする神の赦し」が経験されるのであるという。

こうした「神学的表現」の背後には、若き日の自伝的文章に告白されている、高倉の信仰への道程を覗き見ることが出来るよう。すなわち、「エゴイズム」としての自我との苦闘の極み、「人間性の危機」、「文化意識の破産」において「自我を超越する『聖なるもの』」、自我ならざる『絶対他者』として厳存する神によって自我が圧倒され、真に解放されるという仕方、高倉

「第一講 聖書とその神観」は、「プロテスタントは（カトリックのいう）教会の権威に代えるに聖書の権威をもってした」と書き出され、「第二講 キリスト観」、「第三講 贖罪観」、「第四講 信仰生活観」と続き、最終の「第五講 福音的キリスト教の特質」は、「福音的キリスト教の真理」は「ただ信仰のみ、恩寵のみ。信仰のみによって救われた者はただ主の栄光のためにのみ生きんことを求める」のであると結ばれる。大部な著作ではないものの、いわゆる「高倉神学」の精髓が、一気呵成の迫力で語り尽されている感があり、学生と教会の修養会における講演をもとにまとめられたという本書成立の背景が頷ける。

本書を貫くものは、創造主なる神の絶対的な超越性、その「客観的実在性」への不動の信仰である。聖書が「神の言葉」として認識されるのは、ただ「聖霊解釈」によってのみであるとされ、近代の内在于主義や文化主義的な聖書解釈は徹底的に退けられる。

私が本書の特色と思うことの一つは、ハンデイ版に新しく付された宮田光雄氏による解説にも同様の趣旨のことが書かれての信仰はその確立を見るのである。その意味で、本書は神学書の体裁を取ってはいるが、むしろ信仰告白の書と呼ばれるのが相応しいのではないかと思う。

本書を改めて読了しての感想は、私の微温湯的な信仰生活に冷水を浴びせられたということであった。本書という飾にかけられるとき、果たして私はキリスト者として主の前に立つことができるであろうかと慄然としたのである。本書に接するとき、同じ意味で戦慄を覚え、そのあまりの厳しさの前にたじろぐ読者も少なくないのではなからうか。しかしながら、高倉徳太郎という歴史に残る神学思想家が渾身の力で著し、かつ多くの信仰の先達を養ってきた本書を、そうした思いで敬遠することは許されないであろう。私たちは本書を通して、プロテスタントイイズムの持つ厳しさを改めて直視すべきではないかと考える。

(うぬま・ひろこ) 元聖学院大学大学院教授
(B6変判・二五五頁・本体一八〇〇円＋税・新教出版社)

現代聖書注解
全44巻『第42回配本』

サムエル記下

W・ブルツゲマン 矢田洋子 訳



イスラエルが国家へと変容する激動の時代。政治的社会的現実主義、ダビデという独自の人物、主なる神の現臨という三つの要因から聖書を読み解く。
A5判上製・258頁・5400円

この最後の者にも

福音書の語るメッセージ 四電揚



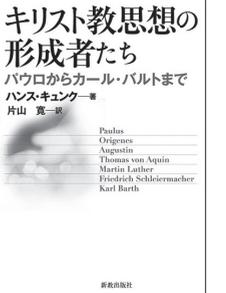
主イエスの誕生から復活までを語り、新しい生き方を促す12の喜びのメッセージ。福音書を貫いてあらわされる豊かな神の愛が心にしみとおる。
四六判並製・160頁・16200円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyoubu@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》
<http://bp-uccj.jp>

巨匠による一流の神学思想史入門

ハンス・キュンク著
片山 寛訳

キリスト教思想の形成者たち パウロからカール・バルトまで



若名定道

ハンス・キュンク（一九二八年―）は、二十世紀後半を代表するカトリック神学者の一人であり、現在に至るまで、神学界から世界へと積極的な発言・発信を続けているキリスト教思想家です。スイスに生まれ、カール・バルトの義認論の研究で博士学位を取得、第二バチカン公会議で活躍しましたが、その後教会論や教皇無謬論をめぐる教皇庁との軋轢によってカトリック神学部から追放される中、エキュメニズムを推進し宗教間対話や世界倫理を提唱するなどの活躍を続けています。まさに、キュンクの発言には現代キリスト教の証言者としての重みが感じられます。

このたび、キュンク著『キリスト教思想の形成者たち』が、優れた邦訳によって出版されました。これは、キリスト教思想史を通じた神学入門（「神学への小さな入門書」と言うべき書物であり、これによってキュンクは、体系的思想の巨匠が一流の思想史家でもあることを――バルトやティリツヒがそうであったように――、実演したと言いうことができるでしょう。取り上げられる思想家は、パウロ、オリゲネス、アウグスティヌス、

トマス・アキナス、ルター、シュライエルマツハー、バルトという選り抜かれた七人ですが、読者は、キュンクの目を通してキリスト教思想史の豊かな展開に触れることができます。もちろん、これら七人はキュンクの個人的な好みだけで選ばれたわけではありません。本書が描くキリスト教思想史のキーワードは、パラダイム（思想史の一つの時代を前後から区別しその時代を特徴づけ、時代の思想家たちに共有された思考様式・問題系）ですが、キュンクは、キリスト教史をパラダイムの交代・転換のプロセスとして叙述しています。それは、キリスト教思想を時代状況との相関において捉える試みであり、そのパラダイムを生み出し体現した思想家が先に挙げた七人だったのです。つまり、パウロは新約聖書のキリスト教的パラダイムに、オリゲネスは古代キリスト教的パラダイムに、アウグスティヌスは西方キリスト教的パラダイムに、トマス・アキナスは中世的スコラ的パラダイムに、ルターは宗教改革的パラダイムに、シュライエルマツハーは近代キリスト教的パラダイムに、そしてバルトはポスト近代的パラダイムに対応する人物と

して描かれています。それぞれの思想家についての叙述は明解かつ洞察に満ちており、そして何よりも思想家の評価が公平であることが本書の魅力です。たとえば、「ルターの正しかった点」と「ルターの宗教改革の問題をはらんだ帰結」（二二二―二二八頁）をご覧ください。

さらに、本書の優れた特質として、それぞれの思想家を年表や注を交えて説得的に紹介する――この点で本書は行き届いた入門書です――だけでなく、そこに現代的視点を反映させていることが挙げられます。たとえば、キュンクはアウグスティヌスやトマス・アキナスを論じる際に、両者の女性理解を批判的に検討しています（一三三―一三五、一七六―一八一頁）。またバルトを論じる中で、ボンヘッファー、ティリツヒ、ブルナー、ブルトマンらに触れることによってバルトを相対化することをキュンクは忘れていません（特に、「なお残る挑戦――「自然神学」の箇所において）。

現代のキリスト教思想は多様な動向、多岐にわたる問題が入り乱れ、いわば渾沌とした状況にあります。キリスト教会自体を取り巻く現実もきわめて複雑です。本書のエピローグで、キュンクは「時代になつた神学プログラム」を提示することによって、現代のキリスト教神学の進むべき道を示そうとしています。日本のキリスト教が直面する複雑な問題状況は、まさに「時代になつた神学への指針」を必要としています。こうした中で、本書に描き出されたキリスト教思想史のマクロな視点も、問題解決の重要な糸口となることは疑いありません。このキュンクの「神学への小さな入門書」は多くの読者の期待にこたえる必読の一冊となるでしょう。

（あしな・さだみち〓京都大学大学院教授）
（四六判・三五〇頁・本体二九〇〇円＋税・新教出版社）



烈しく攻める者が これを奪う

新約学・歴史神学論集

住谷眞
Makoto Sumitani



神学と文献学の間を
往還しつつ、
crux interpretum
（解釈者の難所）
に取り組んできた
渾身の論文集。

A5判・上製・函入
定価【本体5,400＋税】円
ISBN978-4-86325-063-5



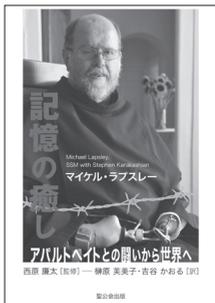
株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

手紙爆弾の標的となった司祭の回想録

マイケル・ラプスレー著
西原廉太監修／榎原美美子、吉谷かおる訳

記憶の癒し

アパルトヘイトとの闘いから世界へ



山本俊正

二〇一三年一月に韓国・釜山で世界教会協議会(WCC)第10回総会が開催された。総会の主題は「いのちの神よ、私たちが正義と平和に導いてください」(God of life, lead us to justice and peace)であった。この総会主題に基づき開会礼拝説教を担当したが、本書の著者、マイケル・ラプスレー司祭であった。ラプスレー司祭の説教は参加者に大きな感動を与え、説教の最後は総会の主題の祈りで結ばれた。WCCが人種差別の取り組みを開始する契機となったのは、第4回ウプサラ総会(一九六八)であった。米国の自由民権運動指導者であるマルチン・ルーサー・キング牧師がウプサラ総会で講演を行った。総会後、教会が国家や社会の壁と隔たりを越えて人種差別を克服していく本格的な取り組みが開始された。一九六九年、WCC中央委員会は「人種差別と闘うプログラム」(Program to Combat Racism=PCR)を設立した。PCRは世界大に広がる人種差別と闘うプログラムを展開した。そのなかでも特筆されるべき動きは、南アフリカにおける反アパルトヘイト運動への連帯であった。アパルトヘイトの歴史は古く、WCCが創立

された同じ年、一九四八年に遡る。この年、白人によるアフリカーナーよりなる国民党が政権を掌握し、アパルトヘイト政策が始まる。一九六一年に南アフリカ共和国となるが、人々を白人、カラード、インド人、黒人の四人種に分けた人口登録法や異人種間の結婚を禁じた結婚禁止法など、アパルトヘイトを進める法的暴力装置が整備されていった。著者は、ニュージーランド出身の聖公会司祭で、一九七三年に南アフリカに派遣される。まさに、白人至上主義の絶頂期であった。南アフリカに到着した翌日、無事に着いたことを知らせる手紙を投函するために郵便局に行くと、二つの入り口があり、「白人専用」と「白人以外」に分けられていた。人種隔離によって引き裂かれたアパルトヘイトの現実に向面した最初の体験であった。この経験は氷山の一角に過ぎなかった。教会もアパルトヘイト体制を支援し内在化させていた。ラプスレー司祭は、アパルトヘイト政策を擁護する教会の聖書解釈に真正面から対抗する。自らの信仰と向き合いながら、南アフリカの人々の解放のための武力闘争をも視野に入れる。解放闘争の結

果、南アフリカ政府より国外追放される。司祭の自宅に送りつけられた手紙爆弾によって、両手と片眼を失い、耳の鼓膜が損傷される。

本書は、ラプスレー司祭の半生記を描いた自伝的回想録である。四部で構成されている。第一部は、人生の大きな転機となった手紙爆弾事件の詳細について、障がいの受容、葛藤、回復について記述されている。第二部は、自らの信仰の旅の変遷が、生い立ちを含めた自分史として書かれている。南アフリカ、レソト、ジンバブエでの働きと体験が詳述されている。第三部では、手紙爆弾事件を契機に自由の闘士から傷ついた治癒者に変えられていくプロセスが描かれている。傷ついた人々の記憶に寄り添い、癒しのために自らを捧げる決意の背景が記述されている。第四部は、師が主幹する「記憶の癒やし」研究所のワークショップを中心とした働きが、世界各地で、現在進行形で展開されている様子が描かれている。また、各地で行われたワー

クシヨップの参加者による証言が付記されている。読者は臨場感をもって、世界各地で傷ついた人々の記憶と体験を共有することができる。

本書は著者の回想録として書かれているが、南アフリカのアパルトヘイトという不正義に、具体的な行動をもって対峙した一人の信仰者の証言集として読むことができる。師の目を通して、体験を通して、祈りを通して、葛藤を通して、赤裸々に語られる物語が私たちの生き方や信仰を照射する。それは、アパルトヘイトが「過去」に回収され、終わったのではなく、現在に生きる私たちの問題であることを示唆している。本書「記憶の癒し」は、ヘンリー・ナウエンの著作「傷ついた癒し人」(Wounded Healer)をも想起させる感動的な名著である。

(やまもと・としまさ＝関西学院大学教授、宗教主事)
(四六判・四〇八頁・本体三〇〇円＋税・聖公会出版)

聖公会出版

——新刊案内——

記憶の癒し

アパルトヘイトとの闘いから世界へ

著者：マイケル・ラプスレー 監修：西原廉太
訳：榎原美美子・吉谷かおる (四六判 本体価格4,000円)

著者は、デズモンド・ツツ大主教とともに南アフリカのアパルトヘイト撤廃運動家として献身。そのため一九九〇年手紙爆弾テロに遭い、両手と片方の目の視力を失った。その体験から苦難にある人々の癒しの旅路に寄り添うことを選び取った。本書はその感動的軌跡を綴ったもの。故ネルソン・マンデラ元大統領が絶賛した話題の一冊。

新しい創造

聖書を読むために

著者：太田道子

(四六判 本体価格1,000円)

著者は聖書を読むための基本事項を分かりやすく説明し、神と人間の関係を明確にする。それはクリスチャンのみならず教会の外にいる人々にも語りかけるものである。そして聖書を読むことは人が現実的に正面から向き合い、人間と社会を癒すための力となることを示す。多くの人が待望していた碩学太田道子の久々の著作。

ユーカリスト

新たな創造

著者：ウィリアム・ロジャツト
監修：竹内謙太郎 訳：後藤務 (四六判 本体価格4,000円)

クリスチャン共同体の中心となるユーカリストの伝統について、新約時代、中世、宗教改革時、近代、現代までの神学的解釈を網羅する。著者のクオケットは、バンクーバー神学院の組織神学教授。欧米の多くの神学校の教科書となっている定評のある一冊。

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
☎03(3235)5681 FAX 03(3235)5682
http://seikokai-publishing.jimdo.com
nsk-bookshop@company.email.ne.jp

福音の力に圧倒される説教集
ニクラウス・ペーター著
大石周平訳

信仰のいろはをつづる

魂の解剖図と告白 フラウミュンスター教会説教集 1



川村輝典

フラウ・ミュンスター教会と言えば、スイスの宗教改革と密接に関わる教会である、という漠然とした気持ちで、妻と同教会の礼拝に出席したのは、二〇〇七年八月十二日のことであった。かつて、国際新約聖書学会に参加した際、この教会の礼拝に出た時には、広大な会堂に比して全体でせいぜい二〇〜三〇名ほどの出席者、という寂しさであったのが、このたびは優に二〇〇名以上の出席者——この急変ぶりはどうしてなのであるうか。その理由を、隣席の中年の婦人が熱っぽく説明してくださったが、それにしてもこの礼拝出席者の急増ぶりには、ただ驚かされるばかりであった。

それ以来今年まで、毎夏この教会の礼拝に出席して来たが、結局ペーター牧師の説教を聞いたのは二回のみ、それ以外は別の牧師の説教であった。礼拝が終わると、その日の説教内容が印刷されており、改めてもう一度、聞いたばかりの説教を深く味合うことができ、われわれ外国人にはとてもありがたいことであった。

ここに取り挙げられているのは、私が直接に聞いた説教では

ない。日本キリスト教会神学校で御一緒に学んだ大石周平氏が、二〇〇九年から二〇一四年までの五年間チューリッヒ大学留学中に聞かれた、多くの説教の中の最初と最後の年の、ペーター牧師による二つの説教シリーズである。

第一のシリーズは二〇〇九年八月九日から十一月二十二日までの十回、聖書講解のかたちで語られた説教である。本訳書では「I 信仰告白——信仰のいろはをつづる」の部分にあたり、また第二のシリーズは、主題が「詩編」であり、二〇一四年一月十二日から四月十八日の受難日にいたるまで、同じくフラウ・ミュンスター教会の礼拝で語られた、全十回の説教と、さらに今年十月十二日の来日に際して、日本の教会で語られたものが加わっている。

Iの十回の説教に先立って、「クルヘッセン・ヴァルデック福音主義教会信仰告白」が掲げられている。私たち日本の改革教会が使徒信条とニカイア信条を重視し、その告白に立って聖書の御言葉に聞いているように、フラウ・ミュンスター教会他スイスの改革教会はこの告白に立って、主の御言葉に聞きつつ

ある、ということができようであろう。

ペーター牧師によるならば、ここに語られた説教は、すべて「信仰告白」についての説教シリーズ」に属するものである。同牧師によれば、この方法による説教にも、大きな危険が存すると言われる。しかし、そのような批判がなされる危険性を敢てものともせず、このような企画を立てられた同牧師に全面的な敬意を表したい。特に、現在の日本基督教団の諸教会において、このような計画は、きわめて有効ではないかと考えられる。

「II 魂の解剖図としての詩編」は、一編を除いて他はすべて詩編のテキストに基づいた説教である。われわれは、スイスの改革派教会の説教であるから、改革派的な説教内容を想像するが、ここに語られているのは、「人間の内奥の感情」に焦点があてられた、したがって、われわれ「人間の生き方、ありよう」を生々しく切り取り、そのようにして「会衆を神の前に立たせる作業に徹した」ものであると、と訳者大石周平氏は「訳者あとがき」で記している。訳者はこの姿勢を「人間の肯定」と表現し、そこから本書IIを「人間の肯定」と定義付けているのである。

この部分は、九番目の「大魚の腹の中から」を除いた他の説

教はすべて詩編をテキストとしたもので、われわれにはありがたい選択であったと言えよう。

Iに収められた説教は、すべて「信仰告白——信仰のいろはをつづる」という題目でまとめられ、これは本書の日本語の表題ともなっている。

この部分で印象的なのは、われわれの信仰が、自分が捉えられた、語りかけられたという驚きの体験から開始し、そしてこの姿勢をもって聖書の御言葉に聞く、ということが強調されていることである。

第四週目の説教においては「選び」ということが扱われるが、この選びとは決して、信仰者の特権を意味するものではなく、「神の声に耳を傾ける人間の共同性」を意味すると言われる。それは特権ではなく、使命ともいべきものである。

本説教集が、日本の改革長老教会のみではなく、広く日本の教会に属する人々によって読まれ、著者や訳者と共にもう一度、福音の力に圧倒されることを、切に願うものである。

(かわむら・あきのり) 日本基督教団隠退教師

(四六判・二六二頁・本体二四〇〇円+税・一麦出版社)

近代と格闘した神学者群像
F・W・グラーフ編
安酸敏眞監訳

キリスト教の主要神学者 下 リシャール・シモンからカール・ラーナーまで

本書は『キリスト教の主要神学者』二巻のうち、近代以後を扱う下巻で、取り上げられているのは、副題には「リシャール・シモンからカール・ラーナーまで」とあるものの、近代との対比の必要からだろう、一七世紀の正統主義者ヨハン・ゲアハルトから始まって、総勢一七人の「古典的代表者」である。編者のグラーフはミュンヘン大学神学部で教鞭を取る傍ら、ドイツ福音主義教会だけでなく、欧州の多元的文化、宗教のグローバル化などのトピックでジャーナリズムに多くを発信してきた著名人である。

さて本書の主要神学者の選定には、グラーフの「独自の神学史観がよく反映されている」と監訳者の安酸氏が解説されているとおり、総花的な前シリーズとは一線を画し、神学が近代と如何に格闘してきたか、キリスト教ヨーロッパが啓蒙主義以後、どうすれば精神的共同体を維持しえるか、というトレルチの問題意識で貫かれている。神学者の誰を「古典」とするかは編者の判断が大きく働くが、カトリック神学に「近代性を切り拓いた」(四一頁)シモンから始まって、同じくカトリック教会の



栗林輝夫

「シンボリック的人物」(三五七頁)としてあるラーナーで終わることには、実際グラーフの一貫した問題意識を垣間見ることができる。「これまで顧みられなかった若干名の重要な神学者を組み入れ」(編者「日本語版へのあとがき」)たとあるが、実に前企画の六割の神学者が消えるという大幅な組み換えには編者の強い主張が裏打ちされている。

新たに選入されたゲアハルトは日本では本書ではじめて読むという人がほとんどだろうし、またシュペーナーは、ドイツ敬虔主義の研究者でもなければ、名前くらいしか馴染みがない。常道からすればリッチュルは選ばれてしかるべきだし、敬虔主義の系譜でもツインツェンドルフではなくなぜシュバルディングなのか、キルケゴールが採られてなぜヘーゲルが選に漏れるのかと問いたい人もいよう。近代の超克という観点で見ればバルトが選ばれることは頷けても、ボンヘッファーが入らないのは納得できないという者もいよう。評者個人の興味としても、モダニストとしてのティヤール・ド・シャルダンを、福島原発事故以後のコンテキストでもって読んでみたい気もする

る。東洋哲学でキリスト教に独自の解釈を施した南インドのアパサミが外れたのは納得できても、大御所のパウアーすら落として複数の神秘主義者を紹介するというのは、古プロテスタントイズムと新プロテスタントイズムを区別して、一七世紀のキリスト教人文主義者やスピリチュアリステンをもって近代個人の先駆けとしたトレルチの類型論からは十分に納得がいく。アメリカのニーバー兄弟、とくにリチャード・ニーバーが代表的な神学者に新しく選ばれたことも、彼の遺訓を継いだイェール学派にとって、近代とキリスト教というトレルチ的な課題が中心的なことを思えば頷ける。トレルチが格闘した問題はアメリカでは、キリスト教の真理要請とポストモダンの多元主義とをどう調停するかというポスト・リベラル神学の問題となつて争点化した。そうしたモダニズムの評価、キリスト教の絶対性、多元主義時代のキリスト教などの問題枠で読めば、クロイトゲンといった新スコラ主義の伝統墨守派の神学者がわざわざ紹介さ

れるのも成程と合点が行く。

「信頼のおける神学研究へのガイドブック」という監訳者の紹介はその通りである。神学教師の末席にある評者の印象としては、本書は少なくとも大学院前期レヴェルの素養がないと咀嚼できないと思う。しかし、いつまでもウィキペディア程度の常識に満足してはならないのも確かで、神学が近代と格闘してきた意味と問題の深さを知る点では実に有益な教科書である。日本語で読める一次文献、二次資料が添えられているのも有難い。訳者に感謝して、本書が近/現代の欧州神学の優れた概説として活用されることを望みたい。

(くりばやし・てるお 関西学院大学教員)
(A5判・四一六頁・本体四二〇円+税・教文館)



信仰のいろはをつづる

魂の解剖図と告白
フラウミュンスター教会説教集 I
ニクラウス・ペーター
Niklaus Peter
大石周平*訳



スイスで今、
最も注目を集める説教者！
伝統的な神学的主題を
新鮮な切り口で語り直し、
スイスの人びとの心をとらえた
力に満ちた説教。

2014年10月、著者初来日！

四六判・並製
定価【本体 2,400 + 税】円
ISBN 978-4-86325-072-7



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

大自然を慈しむ主に捧げられた賛歌
池利文写真、門脇佳吉編集・解説

アッシジの聖フランシスコの面影 教皇フランシスコに捧ぐ



小中陽太郎

新しい年の始まりに、このような美しく心を捉える写真と文章に出会えるとはなんとという、みめぐみであろうか。本書は、日本文化に深い理解を示される門脇佳吉司祭と、『空海の宇宙大伽藍』で知られる写真家池利文氏とのお二人による、「アッシジの聖フランシスコ」についての写真と文章である。

金色の天使の傍らに一步控えめに立つ、まるで幼児のようにあどけない聖フランシスコ、ウンブリアの平野の彼方の丘、朝日に浮き出る回廊、そしてページをくると、膝り糸で丹念に縫われたラフな茶褐色の一枚の襪に心を鷲掴みにされる。きつと重い病の床にあっても聖人をくるんだのだろう。アッシジのフランシスコ大修道院長はケースから取り出し池のレンズの前に広げてくださったそうだ。主は、一本の木綿糸にも壮麗な大寺院にも宿られる。それを見抜いたカメラの目に涙を拭得ない。本書は奇しくも、聖人と同じ教皇名をえらばれた現教皇に捧げられている。

門脇司祭の創作能「ヨハネの洗礼」をイグナチオ教会で参観する機会にめぐまれたことがある。その後妻の従兄弟梅原猛がた。フランス人だが、幼時ナイジェリアで育ち、今はモーリシヤスに住む。ル・クレジオは、「文学はリズムであり、それは野生動物に似る」と喝破した。「はじめに言葉があった」とははるかにかけ離れている。最後にル・クレジオは一句の俳句でしめくくった。

彼同様、英語で引く。

Even so long

A day not enough for singing

—— That skylark

永き日も囀りたらぬひばり哉

韓国は私にはつまづきの石であり、また目の鱗を落としてくれる。金芝河、金大中の死刑求刑とその不屈の闘いが私を主に導いた。今度もまた。

芭蕉にとって雲雀は雄を求めて鳴いているのではない。太陽を賛歌しているのである。

俳聖を引き合いに出さずともいい。たまたま、本稿に苦吟しつつ、テレビに目をやると『課外授業 ようこそ先輩』（NHK Eテレ 一月二四日再放送）で、俳人長谷川權のすすめに一人の男の子（宇城市立小川小学校五年）が吟じた。

こんにちわ すわっていいと ことりがいい
ここにもフランシスコがひとり。

現代口語による謡曲（「世阿弥」）に情熱を燃やしているので併せて教えられること多かった。つい最近も梅原と妻の伯父である明治の硯友社の小栗風葉の生誕一四〇年記念会で、藤田流家元藤田六郎兵衛の能管を聞く機会を得た。四三〇年前の萬歳楽という笛の音は唳々として清冽、耳朶を劈く迫力に満ちていた。

ところで門脇司祭の深く沈潜する問題（それは私がペンクラブでお仕えた遠藤周作にも通ずるものであるが）は、遠く近東のユダヤの地に発生し、ヨーロッパ中世に育まれ、近世に至って北ドイツにプロテストの声を上げたジュディオ・クリスチヤニティズムがいかにして、自然を神とするアジアに根付きうるかという難問であった。これこそ我が師森有正先生も苦悶し、なんんかの優れた思想家は多神教に戻った。

門脇神父にとってはそれをつなぐのは、一羽の小鳥であった。聖フランシスコこそヘレニズムとアジアをつなぐ、しつけ糸といったら、キリスト教史への冒瀆であろうか。

二年前新羅の古都慶州で開かれた国際ペン大会に臨んだことがある。そこでノーベル賞作家ル・クレジオの開会講演を聞き

『三四郎』に友が借りる借家の庭の描写がある。「菊が一株ある。このほかにはなんにもない。……気の毒なような庭である。ただ土だけは平らで、肌理が細かではなはだ美しい」。そしてそこに漱石は三四郎池の美禰子を登場させるのである。『坊っちゃん』ならマドンナ（聖女）とまでは言わなければいけません。

自然も語る、それが門脇神父のかがった日本人のキリスト理解の糸だった。

門脇司祭のご文には、聖人の名高い「太陽の賛歌」が上欄に掲げられている。

わが主よ、御身は賛美されますように、

姉妹で、われらの母なる

「大地」によつて。

この母はわれらを養い、治め

さまざまの実と

色とりどりの花や草を生み出す。

本書は芸術家と司祭の二人によつて捧げられた聖フランシスコ賛歌である。

（こなか・ようたろう＝作家、日本ペンクラブ理事、野村胡堂文学賞受賞者）

（A4変型判・一四〇頁・本体二八〇〇円＋税・教文館）

アウグスティヌス神学著作集

アウグスティヌス著
金子晴勇、小池三郎訳
キリスト教古典叢書



片柳榮一

慈愛の眼差しとしての恩恵

本書はアウグスティヌスの恩恵論を中心とした神学的著作の代表的なもの（大部分はすでに『アウグスティヌス著作集』に訳出されている）を集めたものである。これらを読み返して、人間の自由についてのアウグスティヌスの洞察の透徹した深さと、様々な仕方で心に触れてくる憐れみの呼びかけとしての恩恵経験の生き生きとした豊かさをあらためて思わされた。

アウグスティヌスが論争の相手とするペラギウス（および彼に従う人々）の自由の考え方は、或る意味できわめて真つ当で、尊重されるべきものである。それは、人間を人間として他の生き物からまさに区別する責任能力としての自由の擁護である。しかも経験的事実の問題としてではなく、人間存在そのものの構造に由来する可能性の問題としてペラギウスは主張する。「罪を犯さない能力そのものは〔自由な〕決断の力のうちにある」というよりも、むしろ自然の必然性のうちにある。自然の必

然性のうちに置かれているものはすべて、自然の創始者に、つまり神に所属していることは疑いの余地がない。それゆえ——彼は主張する——本来神に所属していることが知れ渡っているものが、神の恩恵なしに語られるとどうしてみなされようか」『自然と恩恵』の第五章、二九二頁）。ペラギウスにとって恩恵とは、罪を犯さないことが出来るように人間が創造されていることである。アウグスティヌスも神が人間を罪を犯さないことができるように創造されたことは否定しない。問題は「善を意志することは備わっていても、善を実行することは備わっていない」（ロマ七・一八）という人間の現実であり、この意志の無力さをペラギウスが直視していないことである。しかしアウグスティヌスが人間の現実として見ている無力さは、単に律法の命ずることを行うことができないということではない。そうではなく内面の自発性（カント的には道徳性）が問われている。「もしこの戒めが義に対する愛によらず、罰に対する恐怖によってなされるのなら、奴隷的に行なわれるのであって、自由に行なわれるのではない。したがって行なわれる

ことはまったくない。なぜなら愛の根から生じているのではない。実は善でないから」（一五七—一五八頁）である。真に自発的な愛をもっては行いえないという現実がアウグスティヌスには決定的な問題なのである。

このような無力の現実の中で、アウグスティヌスは恩恵の助けを説くのであるが、この恩恵は、人間の主体的意志を無視して、いわば人間を操り人形のように動かす恩恵ではない。応答を促す呼びかけを通して働く恩恵である。アウグスティヌスは決して恩恵を、人間の意志に関係なく、いわば血管に流し込まれるエネルギー源のように、物質的に考えているのではない。そのことを極めて印象深く述べている箇所が『キリストの恩恵と原罪』第一巻四十五章にある。悔い改めがどのように起こるか（恩恵が如何に働くか）の例を、ペトロに対する主の眼差しに求め、しかもルカ伝の記述をそのまま外的な事実としては受け取らず、大胆にペトロの心の内への働きかけとして捉えている。

「使徒ペトロは、外において、下の大広間で召使とともに火にあたって座ったり立ったりしていた。それゆえ主が肉体の目でもって目に見える仕方では彼に注目して振り向かれるということではできなかった。また、それゆえに、「主が振り向いて彼を見つめられた」（ルカ二二・六）とそこに記されていることは、内面において生じ、精神において起こり、意志において生起しているのである。主は憐れみをもって隠された仕方では彼を助けに来たり、心に触れ、記憶を呼び戻し、内なる恩恵でもってペトロを訪ね、内なる人の情意を外的な涙にまで動かし促進させたもう」（三三三頁）。この心の内へのキリストの愛の眼差しこそ、アウグスティヌスが経験する恩恵である。

（かたやなぎ・えいいち＝聖学院大学教授）
（A5判・七四六頁・本体六八〇〇円＋税・教文館）

キリスト新聞社の本
Kirisuto Shinbun, Co., Ltd.

好評シリーズ！
現代の教会を考えるブックレット

2
越川弘英 ● 編著

現場からの提言

牧会って、なんだ？
——現場からの提言——

長年、都会や地方での牧会を経験したベテラン・中堅牧師たちとの対話を基に、その実践例や課題を含めて考察する。

①健康な教会をめざして——その診断と処方
②本題 200頁
③宣教でつながる——現代の課題と展望
■本体 600円

キリスト新聞社
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51
和光プラザ2階
TEL. 048-424-2067 (郵格は税別)
E-Mail. support@kirishin.com
URL. http://www.kirishin.com

好評につき
2刷

■A5判・160頁・
本体 1400円

最高水準の学的労作
荒井 献著

使徒行伝 中巻



加山久夫

本書は荒井献『使徒行伝 上巻』（一九七七年）から三十七年後の出版である。この間、著者はご自身の眼疾やあいつぐ身内のご不幸があり、また学長職など多くの公的責任を担いつつも、幅広いテーマについて研究成果を公刊してこられた。この度、荒井氏が行伝注解の続刊を刊行されたことをこころから慶ぶとともに、近く刊行予定と聞く下巻の出版を鶴首して待ちたい。

三十七年間は長い「回り道」ではあったが、その間に国内外で刊行された多くの行伝研究との批判的対論が可能となったことは、はなはだ意義深い。上巻執筆時の行伝研究の状況はコンツェルマンとヘンヒェンがほぼ「支配」していた。しかし、その後、シュナイダー、ベツシユ、パーヴォ、イエルヴェルほかによる多くの行伝注解が世に出、著者はこれらとの対論を経て自らの見解を提示している。邦語についても、特に、真山光彌氏、田川建三氏とは中巻をとおして対論。（随所で見られる、著者の田川氏への反論に対して批判的応答を期待したい。）

本書は、行伝6章1節から18章22節を取り扱う。「七人」の

ウロ自身は言及していない。つまり、ルカが両者を統合したのであると著者は考える。

第二伝道旅行中、アテネにおけるパウロのアレオパゴス演説やコリントでのユダヤ人による総督ガリオへのパウロ告発（18・12―17）などには、ヘレニズム文学やローマ史の該博な知識が要求される。パウロ書簡との比較的考察が必須であることは言うまでもない。これらの点で、著者の論述は説得的である。

他方、多少疑問も残る。著者はルカが、モーセ（出4・10参照）と同様、パウロ（IIコリ10・10、11・6参照）についての記述に矛盾してまで「言葉にも業にも力」ある者としてパウロを「理想化」しているという（二六八頁）。じじつ、奇跡的救出（16・25―34）の場面では、「パウロはここで全知の『神の人』」、「人間を超えた存在」という。が、「但し、『神的存在』とみなした（イエルヴェル。ヘンヒェン、シュナイダーも同様）とま

選出、ステファノの逮捕・演説から殉教へ、サウロ（パウロ）の回心から第一および第二伝道旅行を内容とする。ルカはこの救済的枠組みの中にペトロによる「神を畏れる」異邦人コルネリウスの回心物語（10・1―11・18）、この出来事から派生する異邦人の救いと食物規定をめぐる「エルサレム会議」と「使徒教令」（15・1―35）などが挿入される。

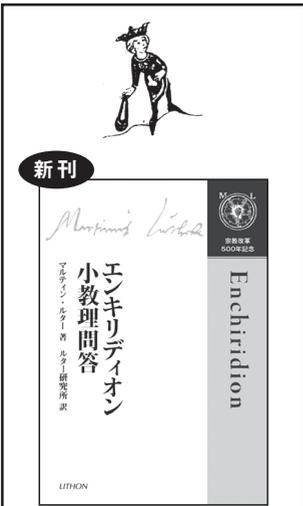
ルカは諸伝承を採用し、それらを縫合して福音伝播の軌跡を物語っており、そこには伝承（歴史性）とルカの編集（創作性）が融合している。著者は各項目において両者を注意深く選り分け、総じてよくバランスのとれた判断をするとともに、随所で独自の見解を提示している。たとえば、コルネリウス物語には食物規定の廃棄につながる伝承があるが、ルカはそこから「異邦人」差別の廃絶を読み取ったという。また、エルサレム会議と使徒教令は別個の伝承に依拠していたが、著者によれば、ルカは前者をいわゆるアンテيوخア事件（ガラ2章参照）との関連ではなく、ペトロによる「神を畏れる」異邦人（コルネリウスたち）の回心と関連づけており、他方、後者についてはパ

では、少なくともルカは考えていないと思われる」（三八五頁）と述べる。概念の整理が必要であると思われる。そもそも、なぜ史的パウロと大きく異なるパウロ像をルカは積極的に描出しているのか。果たして、ルカは「書簡の書き手」としてのパウロを知り、その書簡を読んでいたのだろうか。

いずれにせよ、著者による使徒行伝注解は、わが国キリスト教界のみならず、初期キリスト教への関心をもつ読者層への大きな贈り物である。特に、牧師や神学生はぜひ本書を手にして多くのことを学んでいただきたいと思う。

下記の誤記をしるしておく。① 18頁「前者を後者の下に」↓「後者を前者の下に」、② 80頁注4「順番」↓「順守」、③ 116頁「15年」↓「15日」、④ 163頁「公的証人」↓「公的承認」、⑤ 412頁「主人公して」↓「主人公として」。

（かやま・ひさお 明治学院大学名誉教授）
（A5判・五一〇頁・本体九〇〇円＋税別・新教出版社）



エンキリディオン 小教理問答

ルター著 ● ルター研究所訳
● B6判並製 ● 定価：900円＋税

日本福音ルーテル教会
宗教改革500年記念事業
推奨図書

ルターがキリスト者、またその家庭のために著した『エンキリディオン（必携）』の新たな全訳。本書の歴史的意義とそれが現代社会に持つ意義とは、徳善義和ルーテル学院大学名誉教授（ルター研究所初代所長）による「まえがき」と巻末の「解説」によく示されている。

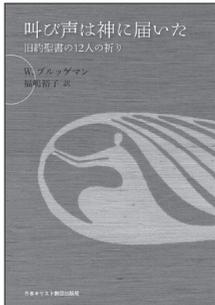
ISBN978-4-86376-038-7

LITHON [リト]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

旧約聖書の祈りの世界を豊かに描き出す
W・ブルッゲマン著
福嶋裕子訳

叫び声は神に届いた 旧約聖書の12人の祈り



大島 力

近年、W・ブルッゲマンの著作が日本において比較的多く翻訳されてきている。『現代聖書注解 創世記』を皮切りに、『聖書は語りかける』『預言者の想像力』（以上、日本キリスト教団出版局）、そして、『古代イスラエルの礼拝』（教文館）である。それに今回、『叫び声は神に届いた―旧約聖書の12人の祈り』が加わった。さらに、現在進行中の翻訳の企画があると聞いている。喜ばしい傾向であると思う。

ブルッゲマンは、極めて多くの書物を出版している現代アメリカの旧約学の重鎮である。研究の範囲は旧約聖書全体にわたり、主著の『旧約聖書の神学―証言・討論・弁論』を始め、現代における旧約聖書神学の展開に大きく貢献している。それと同時に、彼の問題意識の中には常に教会および説教の課題が存在する。それは、最近の『預言者の想像力の実践』（原著、二〇一二年、未邦訳）という説教論に端的に示されている。すなわち、ブルッゲマンは現代旧約学と教会の実践を関連させ、両者が相互に刺激を与えることを目指していると言えるであろう。本書『叫び声は神に届いた』の原題は *Great Prayers of the*

Old Testament である。それゆえ「旧約聖書の12人の祈り」という副題がつけられている。適切な表題である。アブラハムの祈り（創世記18・22―33）からモーセ、ハンナ、ダビデ、ソロモンの祈りへと続く。そして、ヨナ、エレミヤ、ヒゼキヤは、バビロン捕囚へといたる王国時代の問題の中で祈りを捧げた人物として扱われる。また、捕囚後の帰還の状況を背景にエズラとネヘミヤの祈りが取りあげられ、最後は黙示文学の中でダニエルの祈りと、人間の深い苦難の問題と取り組んだヨブの最後の祈り（42・1―6）について、最近の旧約学の成果を踏まえて深い考察がなされている。見事な構成であり、また、現代人のささげる祈りへの挑戦的とも言える問いを投げかけている。本書の表題「叫び声は神に届いた」は全体に通じるテーマであるが、取り上げられる最初の事例は、エジプトで苦難を受けていたイスラエルの民の「うめき」と「叫び」である（出エジプト記2・23）。このことについて、ブルッゲマンは次のように語る。「このうめき、叫び、といったイスラエルの民のもっとも基本的な祈りは、特定の誰かに向かって発せられたのでは

ない。これはもっとも注目すべき点である。神に向かって意図的に叫んだのではないため、祈りではないと結論できるかも知れない。しかしもっとも基本的な祈りの特徴はそこにあるとわたしは理解する。そのような祈りには、物質的に困窮する人間のなまの表現がある。声をあげることなしには耐えがたい苦しみと惨めさのなかにいる者の声である」（七―八頁）。

この祈りについての基本的理解は、現代的であり、また旧約聖書における祈りの原点を鮮やかに指示している。苦難の現実の中からやっと発せられた素朴な「叫び」に、神は耳を傾けてくださるのである。

それと対照的な祈りは、ヨブの祈りである。ブルッゲマンはヨブ記42章1―6節を厳密に考察し、通常「それゆえ、わたしは自らをさげすみ、塵と灰のなかに悔い改めます」と訳される解釈に異議を申し立てている。すなわち、ヨブは、罪と告白に關する慣習的な「悔い改め」をしたのではなく、「わたしは塵と

灰について考えかたを変えます」と語ったとするのである。そして、神は、決してヨブを卑屈な運命に定めたのではないことを強調し、ヨブの神の前での主体性を否定しないのである。そして、祈りについては、次のように語っている。「祈りとは成熟した者が、成熟した神に対して行うものである。そのような人物はたやすく神に従うのではない」（二四―二頁）。これもまた、現代人の魂に深く響き、祈りにおける神との格闘を促す言葉である。

耐え難い苦しみの中で発せられる素朴な人間の声としての祈りから、成熟した人間が成熟した神に語りかける祈りまで、旧約聖書の祈りの世界を豊かに描き出す一冊である。

（おしま・ちから青山学院大学宗教主任、日本基督教団石神井教会担任教師）

（四六判・二七二頁・本体二六〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

新刊

Kemajuan dalam Gereja Baptis Tokyo
Kesaksian-Kesaksian Rohani dari Gereja yang Sedang Bertumbuh di Tokyo, Jepang

Akira Watanabe (渡辺 聡彦)

◆英語版に続く「インドネシア語版」……非常に実践的であり、生活に根ざした具体的な適用を伴った信仰であり、魂を追い求める非常に伝道的な姿であり、目的をしっかりと定めた教会の姿である。（日本語版書評より・錦織寛師：日本ホリネス教団・東京中央教会牧師） * A5判・一三〇頁・八〇〇円＋税

既刊

Dynamism of Tokyo Baptist Church
Spiritual Testimonies from a Growing Church in Tokyo, Japan

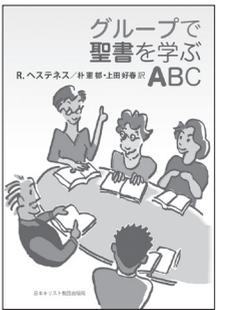
Akira Watanabe (渡辺 聡彦)

社会学的な視点も大切に、教会のあり方を検証したフィールドスタディー！好評の『東京バプテスト教会のダイナミズム1』の英語版！資料や記述は最新版をもとに改訂されています！ * A5判・一二〇頁・八〇〇円＋税

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
自費出版の専門出版社

教会の刷新に時宜にかなった良書
R・ヘステネス著
朴 憲郁・上田好春訳

グループで聖書を学ぶABC



小倉義明

本書は、聖書研究会の持ち方・聖書研究の進め方についての、教会的「学習指導書」です。聖書研究といっても神学的・語学的な学術研究ではなく、書名にあるように「聖書を学ぶ」という教会生活の実際に即したものになっています。

聖書研究（以下、聖研と言う）は、日本の教会では概して大事にされてきているのではないのでしょうか。聖研祈祷会という集会が多くある教会で守られています。けれども、それがどのような仕方であるのかは、信頼に足る統計や調査報告があるわけがありませんから、わかりません。各教会の慣習や教職の好みによって、多様というよりバラバラというのが実情なのではないでしょうか。むしろ各教会の聖研にはそれぞれの特徴があつてしかるべきですが、しかし、このあたりで従前の自家流に反省を加え、霊的な賜物を新しく受ける用意をするべき時が来ているように思われます。

そのような時に出現したのが、本書です。著者であるR・ヘステネス氏は、巻末の訳者あとがきによれば、アメリカ長老教会の牧師、小グループの聖研活動の先駆者で、フラー神学校の

助教授やペンシルベニアの大学学長を務められたとのこと。

本書の著者の信念は、次の言葉に表れています。「教会の復興と刷新が起こるのは、信頼し合ったキリスト者たちが、祈りと聖書の学びと交わりのために、小グループで集まる時だ」（序文）。的確な言と申せましょう。この信念に基づいて（小グループによる祈りと聖研）の意義と実践上の知恵と工夫について述べたものが、本書であります。

本書の叙述は、学術書ではないのに、方法的に十分に熟慮されています。目次を開いて見ると、すぐにわかります。目次の章立てと各章の構成（章―節―項）が論理的に教育的に注意深く組み立てられているのです。

まず「なぜ小グループなのか」その必要性、有効性が説かれ（第1章）、続いて、グループへの参加呼びかけ、時間の設定の仕方などについて、こまやかな配慮をもって提案がなされます（第2章）。第3章は「リーダーと参加者」の問題を扱っています。良い聖研とは、参加者各自が積極的・能動的に自分の読みについて発言できる、話し合いを通して発見と交流ができるよ

うな場である、というのが著者の基本的な確信です。その立場から、リーダーシップの諸スタイルの長短が論じられます。

第4章は、テキストの選択や聖研の仕方（メソッド）についての説明です。聖研の目的（または目標）と方法とは互いに深く関係していると、適切に語られています。聖研の目的は以下のように四つのタイプに分類され、その各々のタイプには合計二十のメソッドが考えられるとされています。

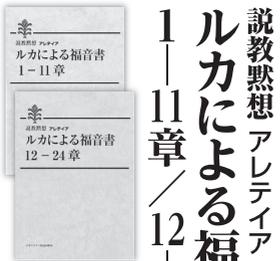
- ① 聖書研究タイプ（知識や理解や生き方の指針を聖研に求める、聖研の基本的タイプ）
- ② 応答タイプ（個人的な省察や話し合いを通して、聖書に対する応答に集中するタイプ）
- ③ 出合いのタイプ（心の深みにおける聖書との出合いを目標とする）
- ④ 実践のタイプ（聖研を通して実際の行動へと導かれることを目指す）

第5章は、以上四つの目的別タイプのうち基本となる第一の「聖書研究タイプ」についての詳説で、第6章は、残る三つのタイプの詳説。両章とも公正な目配りと建徳的なガイダンスです。

現代日本の復興と刷新は、著者の所信と同様、やはり聖研と祈りから始まる、と評者も思います。日本とアメリカとの間には、教会の事情に種々の差異があつて、直輸入は警戒すべき場合が少なくありませんが、本書の主題は（小グループによる祈りと聖研）で、日本の教会の事情によく合致します。その意味では、本書はまことに時宜にかなった良書です。教職はもちろん、指導的な信徒の方々に益するところ大であると考えます。訳文は適切・明快。訳者の労を大いにねぎらいたいと思います。

（おくら・よしあき）日本基督教団使徒教会牧師
（A5判・二三三頁・本体二四〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

「ルカ」の連続講解が待望の単行本化



説教黙想 アレテア 合本 ルカによる福音書

1—11章 / 12—24章

執筆者
加藤常昭 / 小副川幸孝 / 橋谷英徳 / 吉村和雄
高橋重幸 / 菅原裕治 / 古屋治雄 / 上田光正
平野克己 / 佐藤司郎 / 徳善義和 / 高橋誠
楠原博行 / 願念望 / 焼山満里子 / 北尾一郎

聖書黙想誌「説教黙想アレテア」73（83号）に連載された、教派を超えた定評ある牧師・神父・神学者による説教黙想の合本。ルカ福音書の説教準備に必携。《各B5判並製》
1—11章 460頁・6480円 / 12—24章 430頁・6048円

雑誌のご案内
説教黙想 アレテア No.87
(2014年12月11日発売)より
ローマの信徒への手紙
講解開始！
季刊 年4回発行 (3.6.9.12月発売)
B5判 定価税込 1,903円
年間購読料(送料別) 7,612円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigy@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》
<http://bp-uccj.jp>

既刊案内 (2014年10月～11月) (定価はすべて本体価格+税)

著 訳・編 者	書 名	判型	頁	本体価格	版 元	発行日
E.トレルチ 高野晃 著	中世キリスト教の社会教説	A 5	306	4,000	教 文 館	10/15
W.シュバルン 湯川郁子 編	ルター の 言 葉 — 信仰と思索のため	四六	260	2,000	〃	10/15
関泰寛、袴田 康裕、三好明 編	改革教会 信仰告白集 — 基本信条から現代日本の信仰告白まで	A 5	740	4,500	〃	10/20
日本キリスト改革派教 会大会教育委員会 著	子どもと親のカテキズム — 神さまと共に歩む道	B 6	64	500	〃	10/20
ノエル・ストレット 中村妙子 著	ふたりのエアリエル	四六	230	1,400	〃	10/30
桃井和馬 写 陣内大蔵 選 Ensemble DUMAGUETE 演奏	フォト・ソングブック 美しい大 地	A5横	64	2,000	日 本 キ リ ス ト 教 団 出 版 局	10/1
田 河 水 泡	『信徒の友』創刊50周年記念 特別復刊 人生おもしろ説法	四六	216	1,500	〃	10/10
W.ブルックマン 著 福嶋裕子 訳	叫び声は神に届いた — 旧約聖書の12人の祈り	四六	272	2,600	〃	10/20
山 口 里 子	イエスの 誓 え 話 1 — ガリラヤ民衆が聞いたメッセージを探る	A 5	200	2,000	新 教 出 版 社	10/10
ハンス・キュンク 著 片山寛 訳	キリスト教思想の形成者たち — パウロからカール・バルト	四六	350	2,900	〃	10/30
荒 井 献	使 徒 行 伝 中 巻 — 現代新約注解全書	A 5	510	9,000	〃	10/31
マイケル・ラプスレー 著 西原廉太 監修	記 憶 の 癒 し — アバルトヘイトとの闘いから世界へ	四六	408	3,000	聖 公 会 出 版	10/18
アンシア・ダブ 著 金成彰子 訳	心 打 た れ て 生 き る — 1 1 2 の 物 語	四六	240	2,000	〃	10/18
ウィリアム・クロケット 著 竹内謙太郎 監修	ユ ー カ リ ス ト — 新 た な 創 造	四六	416	4,200	〃	10/28
市川裕、山 我哲雄ほか 編	聖書的宗教とその周辺 — 聖書学論集46	A 5	760	8,000	リ ト ン	10/20
マルティン・ルター 著 ルター研究所 訳	エンキリティオン 小教理問答	四六	113	900	〃	10/31
日本キリスト改革派教 会大会教育委員会 著	信 徒 の 手 引 き	四六	240	2,200	一 麦 出 版 社	10/10
日本カルヴィスト協会編	カルヴァンとカルヴィニズム	A 5	462	5,600	〃	10/6
ニクラウス・バーター 著 大石周平 訳	信仰のいろはをつづる — フラウミュンスター教会説教集1	四六	262	2,400	〃	10/19
クリスティアン・メラー 著 小泉健 訳	魂への配慮としての説教 — 12の自伝的・神学的出会い	四六	336	2,600	教 文 館	11/20
田 中 利 光 著	ユ ダ ヤ 慈 善 研 究	A 5	356	4,600	〃	11/20
C.ファン・レーウエン 著 池永倫明 訳	コンバクト 聖書注解 — ホセア	四六	222	2,700	〃	11/30
日本キリスト 教団出版局 編	説教黙想 アレテイア ルカによる福音書 1-11章	B 5	460	6,000	日 本 キ リ ス ト 教 団 出 版 局	11/20
日本キリスト 教団出版局 編	説教黙想 アレテイア ルカによる福音書 12-24章	B 5	436	5,600	〃	11/20
バトリック・チェン 著 工藤万理江 訳	ラ ディ カ ル ・ ラ ブ — ク イ ア 神 学 入 門	A 5	200	2,300	新 教 出 版 社	11/20
雨 宮 栄 一	フリードリヒ・ユストゥス・ペーレルス — 告白教会の顧問弁護士	四六	310	3,100	〃	11/30
植 村 静 編	国家の論理といのちの倫理 — 現代社会の共同幻想と聖書の読み直し	A 5	462	1,800	〃	11/30
ルター研究所 編	宗教改革とわたしたち2 — ルター研究別冊2号	A 5	198	2,000	リ ト ン	11/10
小川修パウロ書簡 講義録刊行会 編	コリント前書講義 1 — 小川修パウロ書簡講義録4	B 5	392	3,000	〃	11/28
藤 原 孝 行	聖書にもとづくクリスマス物語	四六	250	1,200	ヨ ベ ル	11/15
錦 織 淑 子	わが家が天国になった — わが家に訪れた恵みの証他	B 6	216	1,000	〃	11/20
林 勘 三	マタイによる福音書 — 8章から12章の説教	四六	192	1,700	一 麦 出 版 社	11/9
川 村 輝 典	ヘブライ人への手紙研究 — その神学的分析	A 5	212	4,200	〃	11/21

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター1771F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区稲32 様ヶ丘センタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://seikokai-publishing.jimdo.com	nsk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.com.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kiristoku.youshoten@me@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://www7.biglobe.ne.jp/~yldnrcs/bs/uev.html	biblehouse@bible.or.jp	00250-4-2512
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881		sksch@mva.biglobe.ne.jp	00540-6-82826
清光書店	951-8114	新潟市営所通 一番町313	025-229-0656	共用			00540-6-82826
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	negoya-seibunsta@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		kjorden@mbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakabos	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三鷹ビル2F	078-331-7569	078-331-9833			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖繩キリスト教書店	901-2131	浦添市牧港1-60-6	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

特集 教会と預言

寄稿者 堀 真悟、絹川久子、田中健三、金井 美彦、樋口 進

未受洗者陪餐とドイツの教会 下…吉田 新
書評「ラディカル・ラブ」……………朝香知己
新連載 ドイツ教会通信……………秋葉睦子
好評連載 望月麻生、高橋優子、一色哲、松谷暉
介、永本哲也、佐藤優、青野太潮、月本昭男、
沢知恵

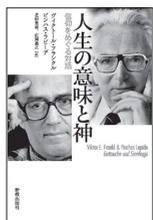
A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

人生の意味と神 信仰をめぐると話

フランクフルト／ラピーデ

読売新聞にて若松英輔氏書評



ナチの強制収容所を生き延びた
精神科医と、ユダヤ教の立場に
立つ神学者が、神とは何か、信
仰とは何かをめぐり、真摯に対
話した記録。
本体2400円

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1

TEL : 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

昨秋、奈良を旅した。近鉄奈良駅を降りて猿沢の池方面に向かうと、賑やかな商店街の中に日本聖公会奈良基督教会を見つけた。さあこれから世界遺産の建築や博物館を見に行こうと意気込んでいた矢先、最初に出会ったのが教会だったとは、やはり神の計らいであろう。人目もはばからず、教会前で祈りをささげた。人目をはばからなかったのは、私が恥知らずだからではない。以前、同じような経験をしていたからである。

二〇〇九年程前のこと、所属教会のT牧師に引率されて、東京・原宿にあるセブンスデー・アドベンチスト東京中央教会の伝道音楽会に出かけた。T牧師は電車の中で聖書を読み始めると終点まで気づかないという熱血の女性伝道者であり、青年信徒がカバンの中に週刊誌を入れたまま礼拝に出席したことを、激しく叱責した清教徒であった。

東京中央教会は竹下通りの近くにあり、教会前の通りを通称

教会通りという。それを知ったT牧師、感動のあまり「教会通り」と記された標識の前で頭を垂れ、祈りを捧げ始めた。道行く人は皆、何事が起きたのか分からず、私たちを避けて通った。当時、バルト神学に凝り固まっていた私は、恥ずかしさのあまり体が凝り固まってしまったのは言うまでもない。

牧師は祈り終わると、「あなたがたも祈りなさい」と促す。「たとえ通称であっても、一般公道が教会通りと呼ばれるのは何と素晴らしいことか」と。言われてみればその通りで、反論もできず、恥も外聞もなく祈った。自分は公道上ではなく、通称、教会通りと言われる「直線通り」(使徒言行録九・一二)に立っているのだと思いつつ。

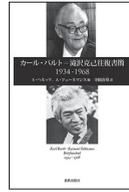
奈良基督教会の前を通った時、その時のことが鮮やかに思い出された。南都仏教の本場にあつて、厳然と居を構える教会への道が、奈良の「教会通り」と呼ばれるよう祈りたい。(寺田)

カール・バルト II 滝沢克己 往復書簡

1934-1968 寺園喜基訳

神学的立場を異にし、緊張関係をはらみながらも、深い信頼関係を結ばれ、戦前から戦後にかけて30年以上にわたり師弟の交わりを保ったバルトと滝沢。二人の間で交わされた、興味尽きない81通の書簡。

◆四六判・本体2700円



逆境の恩寵

祈りに生きた家族の物語
徳永徹著
1月20日



没後出版された信仰の証し『逆境の恩寵』(1904年)は、明治・大正・昭和の大ベストセラーとなった。本書は、規矩の孫に当たる著者が『逆境の恩寵』を分りやすく書き直すとともに、歌子の生涯と子どもたちの後日にも触れる。明治の信仰者の熱い気概に接することができる感動の書。

◆B6変・本体1800円

ラディカル・ラブ クイア神学入門

パトリック・チェン著 / 工藤万里江訳

話題沸騰

性的少数者の視点から再発見された、過激な愛としての神。本書はそれを伝統的な三一論の枠組の中で新しく描き直す。あらゆる分断を乗り越える過激な愛の福音は、既成の価値観にとつては本質的に「クイア」なのだ。

◆A5判・本体2300円



【朝日新聞12月7日水野和夫氏書評】

キリスト教とローマ帝国

小さなメシア運動が帝国に広がった理由
ロドニー・スターク著 / 穂田信子訳



なぜキリスト教は短期間に伝播できたのか？
古代史最大の疑問に對して、アメリカを代表する宗教社会学者が迫る。

ピュリッツァー賞候補ともなった話題作。待望の邦訳。解説・松本宣郎

◆四六判・本体3200円

イエスという人の物語

ホセ・ビヒル、マリア・ビヒル著 / 祐川郁生訳
ラテンアメリカで話題を呼んだ、ラジオドラマに基づくイエス物語。民衆の一年だったイエスが次第に自らの召命を發見していく。144章、1千頁を超える圧倒的な迫力。

◆A5判・本体5000円



たちまち 重版!

一九五七年七月七日 第三種郵便物認可
二〇一五年一月一日発行(毎月一回一日発行)

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ http://bp-uccj.jp (価格8%税込)

イラストを交え楽しく読めるキリスト教入門書



こひつじたちのABC
アダムからはじまる物語

山下智子 文 池谷陽子 絵

「アダム」「バベル」「カイン」など、
AからZまで、旧約聖書の人物や事
柄から26の言葉を取りあげたキリ
スト教入門書。 ◆A5判 並製・130頁・1,512円



好評発売中

『こひつじたちのあいうえお
—愛からはじまるキリスト教』
山下智子 文 池谷陽子 絵 1,728円

福音の喜びあふれるキリスト教おもしろエッセイ

天笑人語 山北宣久

「イースターでイイスタートを」「脳より農!」「ツ離れ」「会話復活」「まさかという坂」「短足万歳」など、36の心を温め笑いを引き出すエッセイ集。天に轟く哄笑を地の上にも!

◆四六判 並製・136頁・1,296円



イベントのご案内

「NTJ 新約聖書注解」監修者による無料公開シンポジウム開催

シンポジウム「新約聖書学と現代の宣教」

日時 2015年3月13日(金)
18時～20時30分

会場 日本基督教団 信濃町教会
東京都新宿区信濃町30

※入場無料(要申込)
※NTJは2017年に刊行開始する新約聖書注解
です。詳細はホームページをご覧ください。

●プログラム/司会:須藤伊知郎

- 1 歴史的批判的研究の宣教的な展開
発題者:辻 学 応答者:李 明生
- 2 物語批評と宣教—説教におけるキャラクタースタディを中心に
発題者:伊東寿泰 応答者:平野克己
- 3 正典は教会にとって今どんな意味を持っているか—正典批評から
発題者:中野 実 応答者:高市和久

申込み 日本キリスト教団出版局 出版第一課 TEL 03-3204-0424 FAX 03-3204-0457
e-mail shoseki2@bp.uccj.or.jp